

中道遺跡Ⅱ

福岡県糸島郡二丈町大字深江所在遺跡の調査報告

二丈町文化財調査報告書

第40集

2008

二丈町教育委員会

中道遺跡Ⅱ

福岡県糸島郡二丈町大字深江所在遺跡の調査報告

二丈町文化財調査報告書

第40集

2008

二丈町教育委員会

序

本書は二丈町深江地区において確認された弥生時代から近世期にわたる集落遺跡の発掘調査記録であります。

これまで同地では旧河川やその流路に沿って弥生時代早期から古墳時代にかけての遺構が検出されてきました。また、今回、その流路の延長部分や柱穴状ピット群が確認されたことにより、さらに広域に集落が営まれていることが確認されました。

今後、本遺跡の調査成果が「伊都国」研究のみならず、我が国の考古学研究の一助となれば幸甚であります。

平成20年3月31日

二丈町教育委員会

教 育 長 藤 田 孝 治

例 言

1. 本書は、個人の宅地開発に伴って実施した埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は平成13年度に町単独費用によって実施し、報告書作成については平成19年度に国県補助を受けて二丈町教育委員会が実施した。
3. 発掘調査の期間は、平成13年9月21日から平成13年10月1日までである。
4. 本書に掲載した遺構図の実測は、古川が行った。
5. 遺構の写真撮影は、古川が行った。
6. 本書に掲載した遺物の実測ならびに遺物写真の撮影は古川が行った。
7. 本書の執筆ならびに編集は、古川が行った。

本 文 目 次

I. はじめに	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
II. 位置と環境	
1. 遺跡の環境	3
III. 調査の記録	
1. 調査の概要	5
2. 検出遺構	5
3. 出土遺物	10
IV. 調査のまとめ	
1. 遺構について	14
2. 出土遺物について	14
3. 中道遺跡周辺の遺跡環境	14

図 版 目 次

第 1 図	二丈町主要遺跡分布図 (S = 1 / 50,000)	2
第 2 図	遺跡周辺図 (S = 1 / 5,000)	4
第 3 図	旧河川土層図 (S = 1 / 20)	5
第 4 図	遺構配置図 (S = 1 / 80)	6
第 5 図	旧河川実測図 (S = 1 / 60)	7
第 6 図	取水施設実測図 (S = 1 / 30)	8
第 7 図	旧河川出土遺物実測図 (S = 1 / 3)	11
第 8 図	遺構検出面出土遺物実測図 (S = 1 / 3)	12
第 9 図	伝深江出土壺形土器実測図 (S = 1 / 3)	14

写 真 図 版

写真図版 1	(a) 遺構全景 (西側から) (b) 柱穴状ピット群近景 (西側から)
写真図版 2	(a) 旧河川全景 (西側から) (b) 土層堆積状況
写真図版 3	(a) 旧河川内 杭列・矢板列検出状況 (西側から) (b) 同上 (東側から)
写真図版 4	(a) 1号取水施設 (b) 2号取水施設
写真図版 5	出土遺物 1
写真図版 6	出土遺物 2

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

平成13年7月、二丈町教育委員会へ個人専用住宅の建築に伴う埋蔵文化財の有無が照会された。申請によると大字深江字中道において、木造二階建ての住宅を建設する計画であったが、当地近隣では平成7年には場整備事業に伴う発掘調査が行われており、弥生時代早期から古墳時代にわたる遺構が確認され、「中道遺跡」として周知化されていた地域であった。このため、照会者に対して埋蔵文化財保護の重要性を説明した上で、試掘調査の必要性を提示している。その後、8月25日付けで文化財保護法第58条の2第1項の規定による埋蔵文化財発掘の届出が提出され、これを受けて翌26日より試掘調査を実施する運びとなった。

試掘調査においては、表土以下、-70cm程で柱穴状ピット群を確認、さらに、西側部分においては、いちだんと深くなり、杭列、矢板列群も確認された。この結果を受けて申請者ならびに建設業者との協議に入ったが、木造二階建て住宅のため基礎深度が40cmほどの建築工事ではあるが、建築予定地の土質が悪いために-100cmほどまで土壌改良を行う計画をされていた。このため、埋蔵文化財の保存をお願いし、整合性を図ったものの結果的には記録保存とする事で合意に達し、9月21日より発掘調査を実施する事となった。

2. 調査の組織

発掘調査ならびに報告書作成に従事した組織は、以下に記すとおりである。

発掘調査（平成13年度）

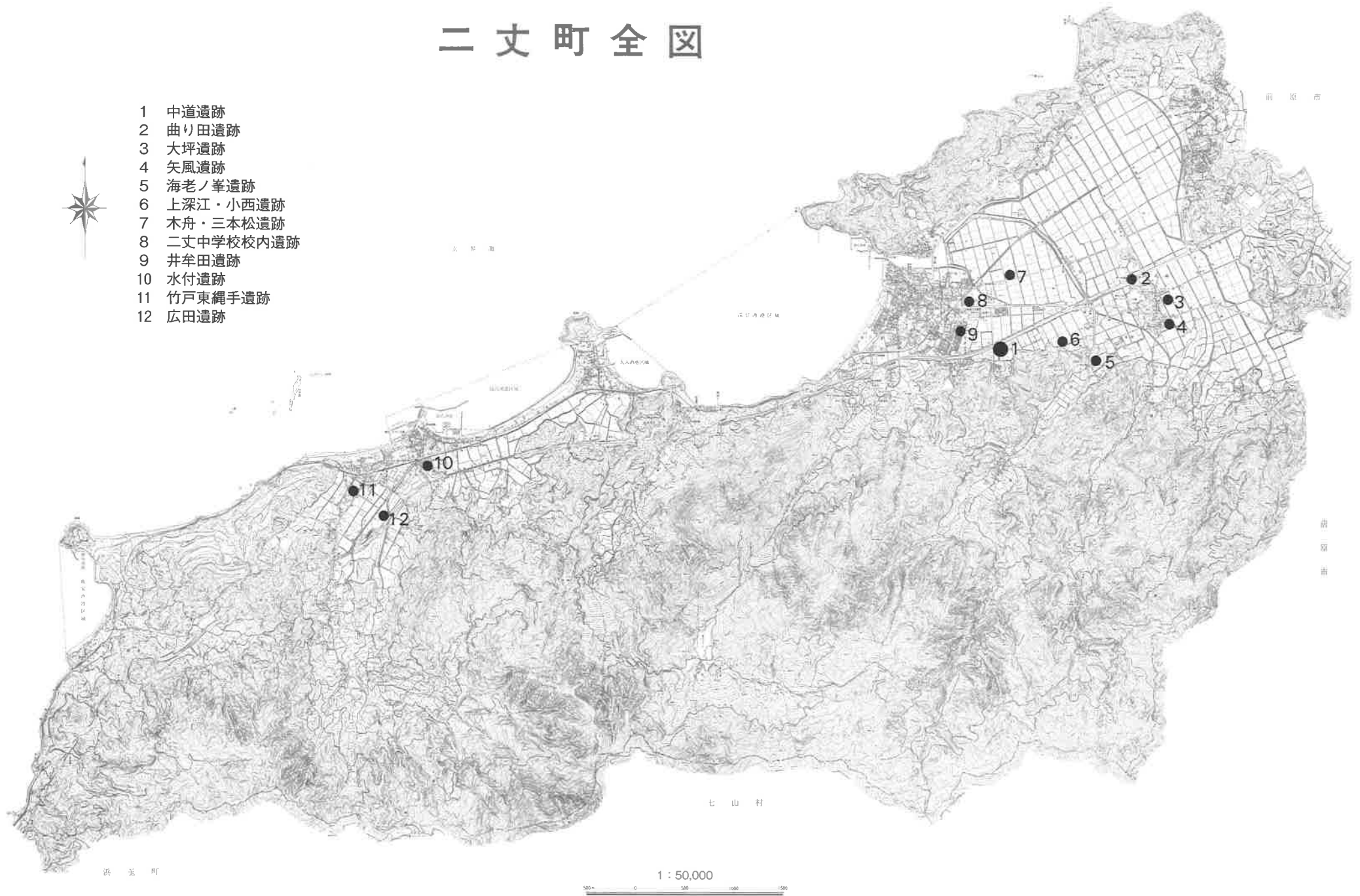
調査主体	二 丈 町 教 育 委 員 会		
総 括	教 育 長	小 川 勇 吉	
	教 育 課 長	青 木 槇 夫	
庶 務	教育課課長補佐	大 庭 一 成	
	社会教育係長	浦 田 豊	
調 査	社会教育係主査	古 川 秀 幸	

報告書刊行（平成19年度）

調査主体	二 丈 町 教 育 委 員 会		
総 括	教 育 長	藤 田 孝 治	
	教 育 課 長	松 崎 治 幸	
庶 務	課 長 補 佐	松 藤 公 元	
	文 化 係 長	古 川 秀 幸（兼：調査担当）	
調 査	嘱 託	菅 さとみ	

二丈町全図

- 1 中道遺跡
- 2 曲り田遺跡
- 3 大坪遺跡
- 4 矢風遺跡
- 5 海老ノ峯遺跡
- 6 上深江・小西遺跡
- 7 木舟・三本松遺跡
- 8 二丈中学校校内遺跡
- 9 井牟田遺跡
- 10 水付遺跡
- 11 竹戸東縄手遺跡
- 12 広田遺跡



第1図 二丈町主要遺跡分布図 (S=1/50,000)

Ⅱ．位置と環境

1．遺跡の環境

中道遺跡が所在する二丈町大字深江地区は、二級河川一貴山川と柳川という二つの河川の流域にあたり、5 km²を測る正三角形の沖積平野となる。北側は松末丘陵、東側は田中から松国に広がる丘陵、南側は脊振山系の山々に囲まれ、西側のみが深江湾へと開いている。

同地は、その地名により「深い入り江」を呈していたとの先入観が強く、平野内には古代の遺跡、特に弥生時代以前の遺構は存在しない地域と考えられていた。また、元来、新砂丘としての砂丘が存在することは、以前から研究されており、第1から第3砂丘までの三つの砂丘があることは確認されていた。このうち、国道202号線付近の第2砂丘上では、西側域にあたる丘陵付近で弥生中期の甕棺墓群が発見されていたため、山裾付近だけは古代の遺跡が存在すると考えられていた。

こうした中、平成元年度に町に文化財担当者が採用されたが、採用後はバブル期の開発や県営は場整備事業に伴って同地域への試掘調査が継続して行われ、海と考えられていた平野部内においても相次いで遺構が検出されることとなった。また、楽浪系漢式土器などが出土した集落跡（深江 井牟田遺跡）や大溝を伴う集落跡（二丈中学校校内遺跡）、石剣や翡翠製勾玉などを副葬していた甕棺墓（木舟・三本松遺跡）などの発掘調査が行われ、それらの結果により弥生期の段階にはかなりの陸化（砂丘化）が進んでいることが確認されるに至った。

本遺跡が所在する深江字中道地区は深江平野の中央部やや南よりに当たり、海浜部からは1.5kmほど内陸部となる。現況は水田域となるが、背後には脊振山系の二丈嶽（標高711.4m）より延びる尾根が迫り、過去の調査からみて微高地や入り組んだ谷が存在していることが想定できた。

同地には平成7年度に県営は場整備事業に伴う発掘調査（中道遺跡第1次調査）が行われていたが、旧地形は砂質土で標高3.0mから3.2mと南から北へと緩やかに傾斜する地形であった。また、北西部と南西部の2ヵ所において湿地帯が形成されており、そこへ延びる自然流路（旧河川）が2本確認されている。

第1次で出土した遺物としては、縄文晩期後半から弥生早期の土器群や石器群（湿地帯）と古墳前期の土師器（1号住居跡）の2時期が確認されているが、竪穴遺構と報告された住居跡らしい遺構からは縄文晩期の漆塗り木製椀が出土しており、注目されるものであった。

本書報告の地点（第2次調査）としては、平成7年度調査地（第1次調査）の南西側にあたる。遺構、遺物の概要は事項に譲るが、地形的には北側へ緩やか傾斜するもので、標高は3.2mから3.4mを測る砂質土面となる。また、南西部では旧河川が一本検出されているが、第1次調査で検出した自然流路にはつながらないものの、方向的には同一方向に流れており、遺跡西側に広がるものと想定できる湿地帯へと流れ込むものであろう。

これまでの調査からみて、深江平野内には弥生前期までには陸化が進み、砂丘や平地が形成されているものの、未だ湿地帯も存在していることが判る。また、陸化の状況は平野中央部で確認された居館遺跡（木舟の森遺跡）からみても平安後期から鎌倉期にはさらに進み、近世期の唐津街道の整備ごろには、今日と変わらない地形の状況であったと考えられよう。

Ⅲ. 調査の記録

1. 調査の概要

試掘調査の結果では申請地の490㎡ほぼ全域で遺構が検出されていたが、本調査の範囲としては、土壌改良が行われる部分を記録保存とすることで協議していたため、建物敷き部分である110㎡を発掘の対象とした。

調査は重機（バックホー）を用いての表土除去から開始し、地山直上の包含層からは人力での掘り下げ、遺構検出作業に移った。

遺跡の地形はコンターラインで3.2mから3.4mを測り、ほぼ平坦となるが、北側に向かって緩やかに傾斜している。遺構は調査区西側において柱穴状ピットを多数検出、また、調査区南西隅では旧河川も確認され、杭列、矢板列が検出された。

順次、説明を加える。

2. 検出遺構

柱穴状ピット群

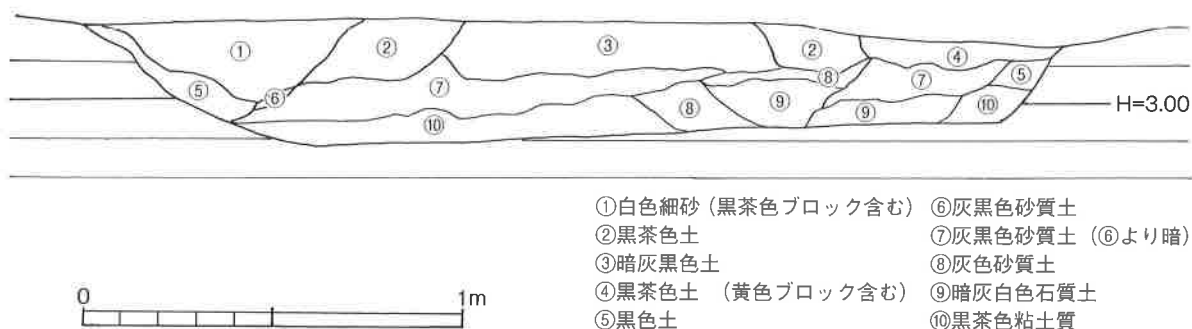
調査区西部、北側に集中している。直径で25cm～60cmを測るものであるが、明確な建物となる柱間規模は確認できなかった。しかしながら、比較的大きめのピットはN-29°-Eに軸線を持つため、建物となる可能性がある。

旧河川

調査区南西隅で検出した幅4.2mの河川跡である。流路方向は東西方向となり、北側へ18°ほど振れる。深さは60cmほどを測るが、河床中央部において杭列、矢板列が検出されている。

堆積土を観察してみると、砂質土系の土壌の堆積が主体を占めている。また、河床は黒色粘質土が溜まっており、杭列や矢板列が検出されていることを考えても、水田部への用水路的な性格となろう。堆積状況では北側が大きく3層の塊に分けられるのに対し、南側は細かい層位分かれており、埋没後に掘り変えられていた可能性も高い。

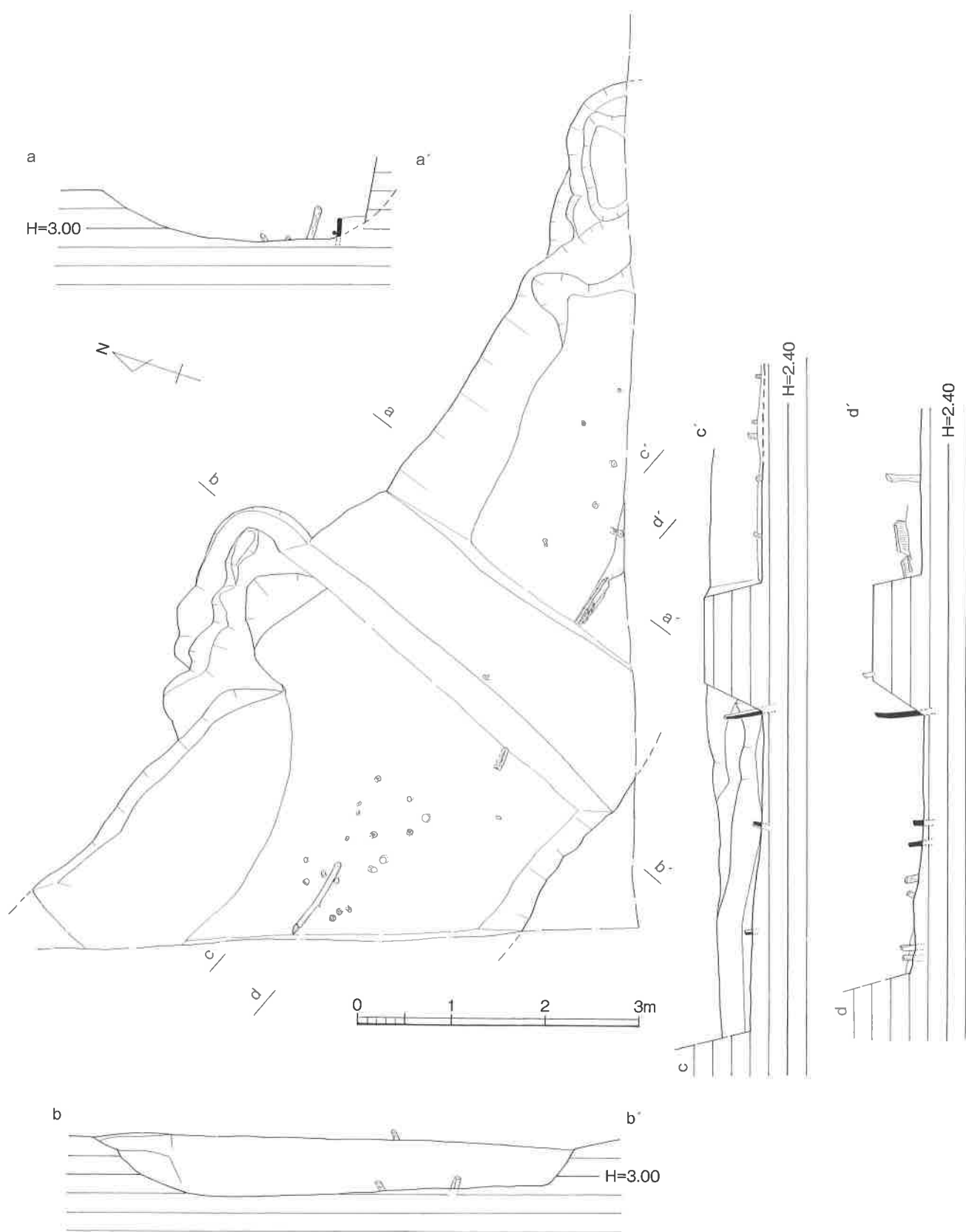
流路方向である北西部には平成7年度の調査において湿地帯が広がることが確認されており、これに流れ込む可能性が高い。



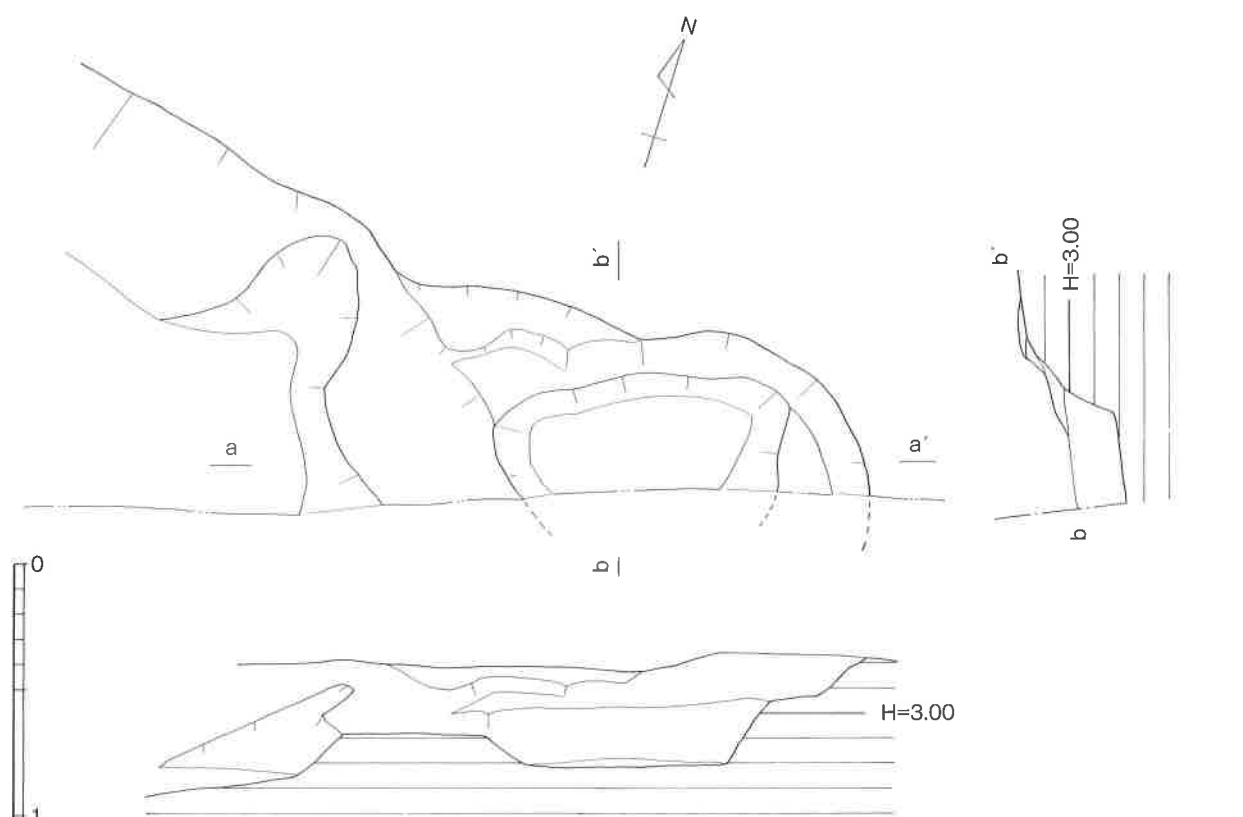
第3図 旧河川土層図（S=1/20）



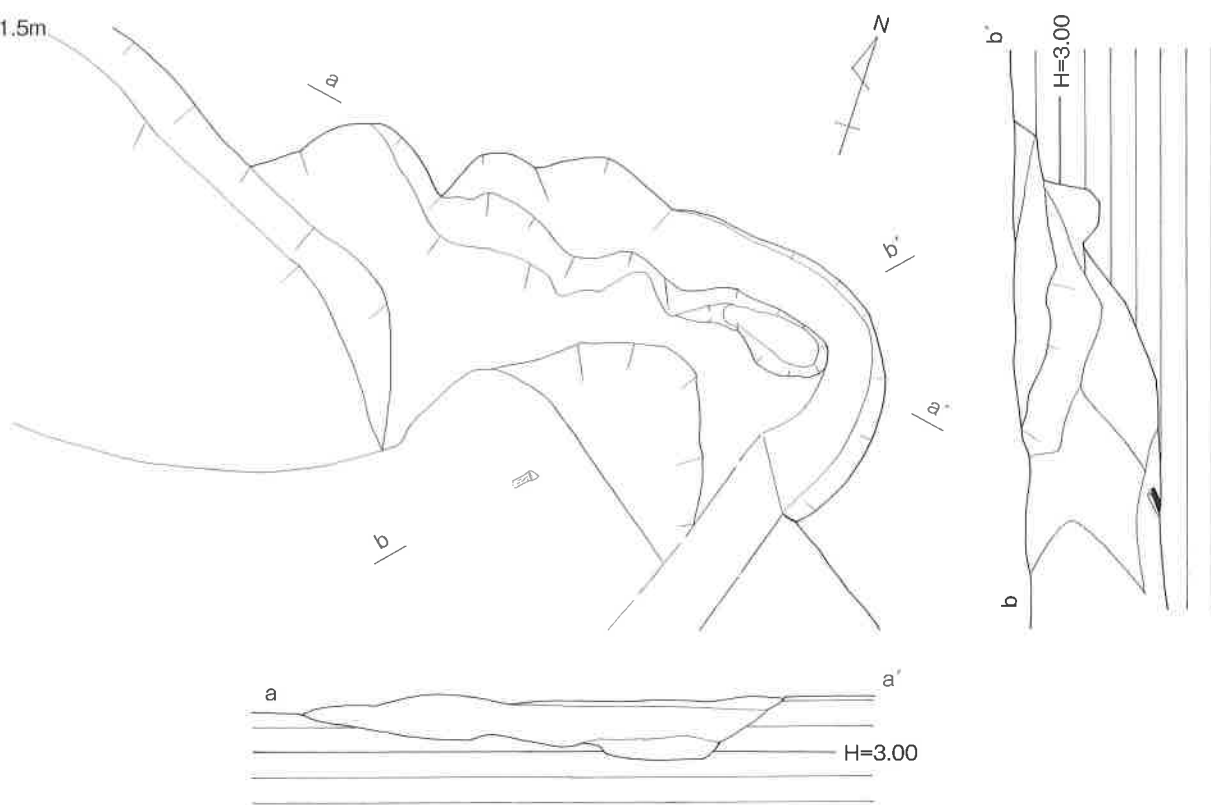
第4図 遺構配置図 (S=1/80)



第5図 旧河川実測図 (S=1/60)



1号 取水施設



2号 取水施設

第6図 取水施設実測図 (S=1/30)

杭列、矢板列（第5図）

旧河川の河床中央部で検出した杭列、矢板列である。杭列は丸杭であり、二列に並ぶ。また、土層観察用ベルト付近では、長さ94.0cm、直径5cmの杭が横に寝ており、その左右が木杭によって留められているものが検出された。

矢板列については河床中央部やや南よりで検出されている。板頭は5×26cmを測り、ベルトを挟んで直線的に続く。また、矢板により止められた竹も出土している。

取水施設

旧河川は調査区南東隅で確認されており、大半が調査区外となる。この旧河川については幅4mほどであるが、右岸の2ヵ所において岸肩に直行する形で楕円形の掘り込みが確認されており、明らかに人為的な遺構と判断できた。また、その形状については、テラス面を持ち、最深部が河川の底と同レベルとなっており、取水施設と考えられる。以下、説明を加える。

1号取水施設（第6図）

旧河川の右岸（北側）で検出した掘り込みであり、調査区南側で調査区外へと延びる。幅200cmを測り、形状は長楕円形。岸肩に斜行して二段に掘り込まれている。また、二段目テラス面には112cm×46cm、深さ22cmを測る掘り込みが検出された。形状より取水施設と判断した。

2号取水施設（第6図）

旧河川右岸の中央部で検出した楕円形を呈する掘り込みである。岸肩の直行して付けられる。幅205cmを測り、テラス面を持つ。また、底は河底と接しているため、取水施設と考えられる。

3. 出土遺物

出土土器（第7図・第8図）

1～19は旧河川出土の遺物である。

1は弥生後期代の甕形土器片である。頸部のしまりは弱く、器壁はやや厚い。内外面、ハケ調整後ナデ調整を施す。色調は暗黄褐色を呈し、胎土には微砂粒を多く含む。焼成は不良である。復元により口縁部径15.2cmを測る。

2は硬質砂岩製の砥石である。両先端を欠損する。現存長6.5cm、幅5.5cm、厚さ2.0cmを測る。

3は磨き石。形状は楕円形を呈す。端部に紐ずれの痕跡が認められる。長軸8.2cm、短軸6.6cm、厚さ2.5cmを測る。

4は縄文晩期の鉢形土器口縁部碎片である。内外面、板状工具による擦過を施す。色調は暗茶色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。焼成は不良である。

5は弥生期の碗形土器口縁部碎片である。外面はナデ調整、内面はハケ調整を施す。色調は淡茶色を呈し、胎土には微砂粒を僅かに含む。焼成は良好である。

6は土師器の碗形土器口縁部碎片である。端部は丸みをおび、やや内傾する。色調は茶褐色、胎土には微砂粒を含み、焼成は不良である。

7は土師質の土器である。直線的に開く体部から口縁部が内傾する。色調は黒茶色、胎土には微砂粒を僅かに含み、焼成は不良である。

8は近世陶器の碗。器壁は比較的的肉厚で、口縁部には段を持つ。地は小豆色を呈し、黒色の釉をかける。胎土には微砂粒を僅かに含み、焼成は良好である。

9も近世陶器の碗。口縁部は玉縁状となる。地は小豆色を呈し、黒茶色の釉をかける。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。

10は無頸の壺。内傾度が強く、口縁部に段を持つ。内面上部から外面にかけて灰色の釉をかける。地は明茶褐色を呈し、胎土には微砂粒を僅かに含む。焼成は良好である。

11は土師皿。器壁は厚く、底部は糸切りとなる。色調は暗黄白色を呈し、胎土には微砂粒を多く含む。焼成は良好である。復元により底部径6.2cmを測る。

12は近世陶器の胴部片。外面はカキ目調整を施し、内面には当て具痕が残る。色調は外面が黒灰色、内面は小豆色を呈す。胎土には微砂粒を含み、焼成は良好である。

13は大型鉢の胴部片である。下方に強い板ナデを施す。内面には三条の直線と波状文を施入する。また、釉垂れも認められる。

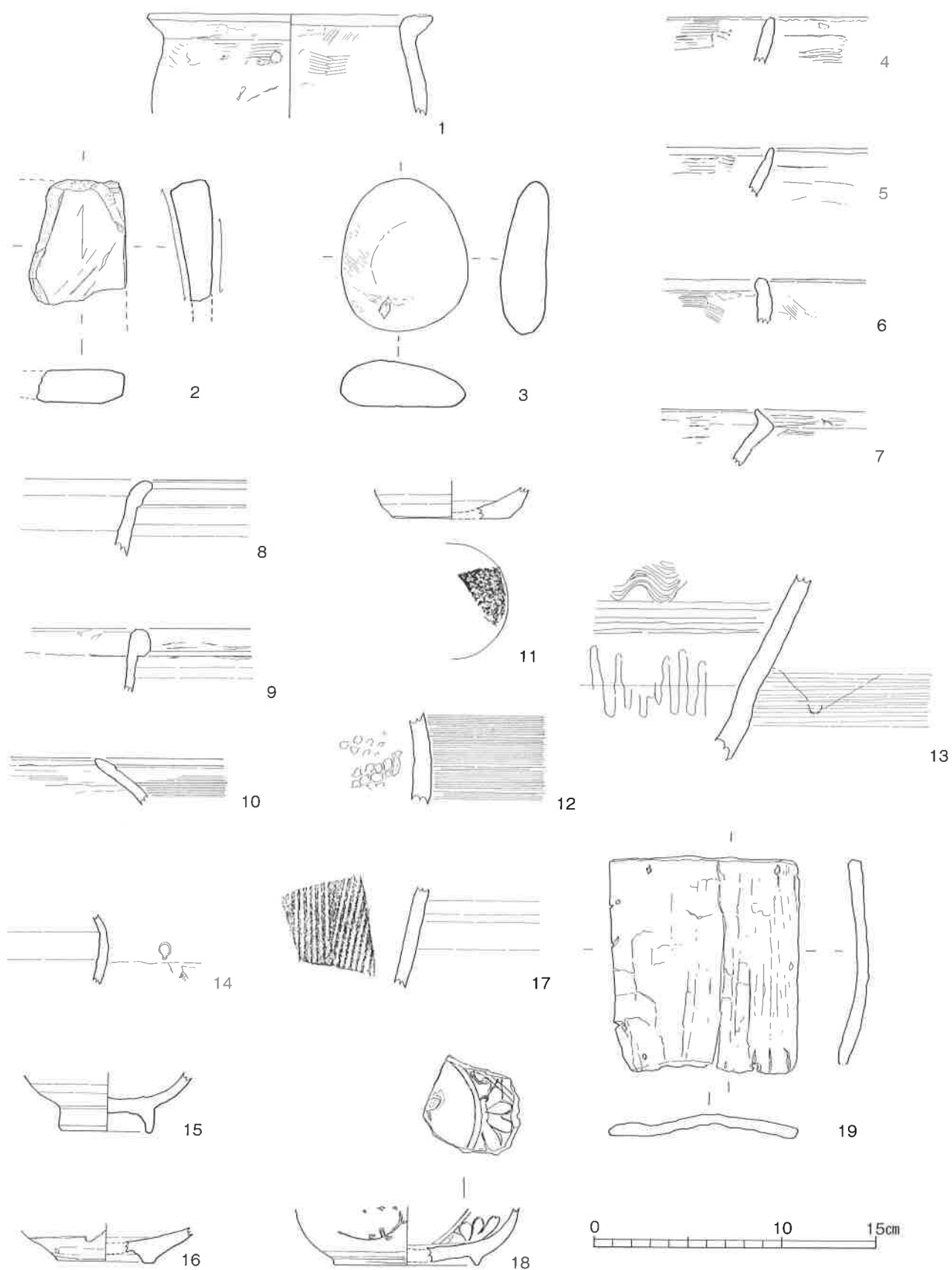
14は丸みの強い小型壺の胴部片。地は小豆色を呈し、外面深緑色、内面暗茶色の釉をかける。胎土には微砂粒を含み、焼成は良好である。

15は高台付碗。高台は高めとなる。地は淡紫黄色を呈し、クリーム色の釉をかける。胎土には微砂粒を僅かに含み、焼成は良好である。復元により高台径5.0cmを測る。

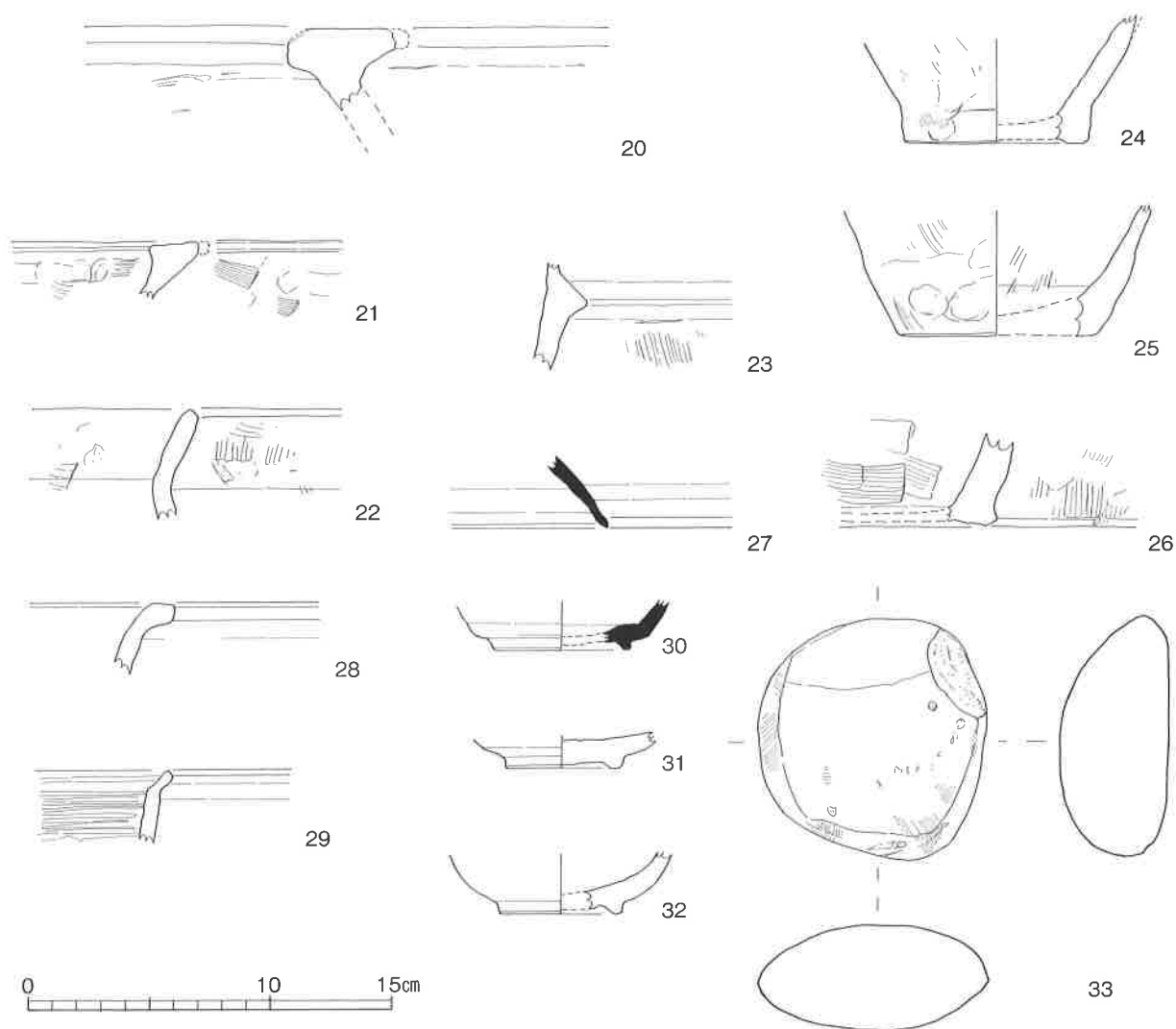
16は低めの高台である。施釉は外面下部にはかけない。地は小豆色を呈し、山吹色の釉をかける。胎土には微砂粒を僅かに含み、焼成は良好である。復元により高台径5.0cmを測る。

17は播り鉢の胴部片。内面に放射線状の摺り面を施す。

18は近世の染付けである。体部の丸みは強く、高台は低い。白地に青色の染付けを施し、模様は外面には梅枝、内面は梅花を描く。高台径7.6cmを測る。



第7図 旧河川出土遺物実測図 (S=1/3)



第8図 遺構検出面出土遺物実測図 (S=1/3)

19は木製の蓋であろうか。形状はほぼ正方形を呈し、長軸11.4cm×短軸10.0cm、厚さ0.6cmを測る。短軸側と長軸側一方に2カ所、長軸側のもう一方に1カ所に孔を穿つ。

20～33は遺構検出面、遺構直上の包含層出土の土器である。

20は甕形土器の口縁部。甕棺片であろうか。口縁形態は「逆L字」状となり、弥生中期後半代と考えられる。色調は明褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好である。

21は広口壺の口縁部片。口縁上端は平坦となる。内外面、細かいハケ調整の後、ナデ調整を施す。色調は明茶褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。焼成は良である。

22は甕形土器の口縁部。内外面ハケ調整後ナデ調整を施す。色調は淡茶色を呈し、胎土には微砂粒を多く含む。焼成は良である。

23は壺形土器の胴部片であり、三角凸帯を付ける。色調は淡茶褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。焼成はやや不良である。

24は甕形土器の底部片。平底となるが、設置部が外側となり、やや上げ底となるものである。内外面ハケ調整後ナデ調整を施し、内面には赤色顔料の塗布が認められる。色調は淡黄褐色を呈し、胎土には微砂粒を

含む。焼成は良である。復元底径7.6cmを測る。

25はやや丸みを帯びた底部片である。内外面ハケ調整後ナデ調整を施し、外面には指頭圧痕が顕著に残る。色調は淡茶褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。焼成はやや不良である。復元底径8.0cmを測る。

26も底部片であり、内外面ハケ調整を施す。色調は黒茶色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良好である。

27は須恵器の蓋である。色調は暗青灰色を呈し、胎土には微砂粒を含む。焼成は良好である。

28は近世陶器の甕口縁部片。口縁上端には自然釉を被る。色調は小豆色～灰色を呈し、胎土には微砂粒を含む。焼成は良好である。

29は近世磁器の椀。地は小豆色を呈し、深い山吹色の釉をかける。胎土には砂粒を若干含み、焼成は良好である。

30は須恵器高台付椀。色調は暗青灰色を呈し、胎土には微砂粒を含む。焼成は良好である。復元により高台径5.4cmを測る。

31は近世陶器の椀。高台付近、胴下位に稜線を持つ。色調は暗黄白色～赤褐色を呈し、胎土には微砂粒を多く含む。焼成は良である。高台径4.4cmを測る。

32は近世磁器の椀である。高台は小さめであり、体部は丸みをおびる。地は淡小豆色を呈し、山吹色の釉を内外面にかける。胎土には微砂粒を僅かに含み、焼成は良好である。復元により高台径5.0cmを測る。

33は叩き石であろうか。川原石を使用しており、剥離面を持つ。10.0cm×9.3cm、厚さ4.5cmを測る。

IV. 調査のまとめ

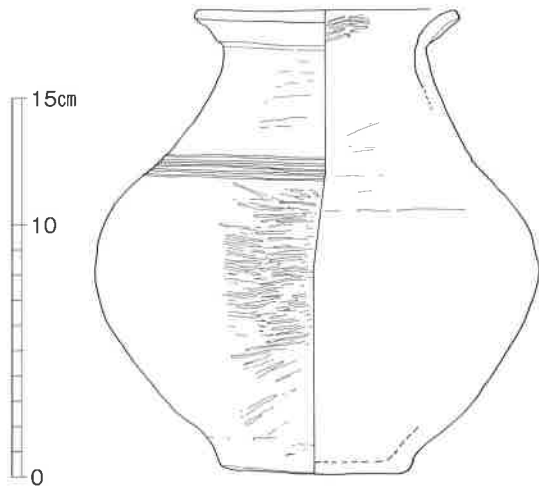
本遺跡の調査をまとめると、以下のとおりである。

1. 遺構について

本遺跡が所在する深江字中道地区では、旧砂丘とその西側に広がる湿地帯が確認されている。

本文でも記述しているが、平成7年度の第1次調査においては、弥生時代早期と古墳時代の竪穴式住居跡と柱穴状ピット群、また、自然流路3本とそれらが注ぎ込む湿地帯が確認されていた。

今回の第2次調査においては、掘立柱建物となる可能性が高い柱穴状ピット群が確認されているが、直接的には第1次調査の遺構に連続するものではない。しかながら、調査区南西隅で検出した旧河川については北西方向へ流路をとっており、第1次調査で確認されていた湿地帯へと注ぎ込むものであろう。



第9図 伝深江出土壺形土器実測図（S=1/3）

2. 出土遺物について

本遺跡出土の土器は碎片ばかりである。その時代性をみると、旧河川を含め、遺跡全体に広がる遺構検出面より出土した遺物は近世期のものが主体を占めている。しかしながら、若干ではあるものの弥生中期後半から後期後半代の土器も認められ、1点ではあるが、縄文晩期の鉢（4）が出土しているため、調査地近辺には縄文から弥生期にわたる遺構が存在する可能性が高い。

3. 中道遺跡周辺の遺跡環境

本遺跡周辺では、遺跡の北側に位置する砂丘上より木舟・三本松遺跡や井牟田遺跡、二丈中学校構内遺跡といった弥生中期から後期後半代の遺跡が連続していることに注目される。

第1次調査では稲作開始期となる遺構、遺物が多いことは先にも述べたが、ここでは現在、東京国立博物館に収蔵されている弥生時代前期中頃の壺形土器を紹介したい。

同遺物は『伝深江出土』とされる完形の壺形土器であり、正確な出土地点については判らないものである。器高18.4cmを測る小型の日常土器であるが、器形の特徴としては、胴部最大径が中位となり、肩部に三条の沈線を巡らしている。また、底部は円盤貼付とはならず、「板付Ⅱ式」の特徴を示している。調整は全面、丁寧なミガキ調整が施されており、やや古相を呈している。

このほか、包含層出土であるが木舟・三本松遺跡からは朝鮮系丹塗り磨研土器も出土しており、深江地区の旧砂丘上においても一貴山地区同様に稲作開始期の遺跡が存在するものであろう。

図 版



(a) 遺構全景（西側から）



(b) 柱穴状ピット群近景（西側から）



(a) 旧河川全景（西側から）



(b) 土層堆積状況



(a) 旧河川内 杭列・矢板列検出状況（西側から）



(b) 同上（東側から）



(a) 1号取水施設



(b) 2号取水施設



1



4



8



2



5



9



6



10



3



7



14



11



12-表



12-裏



11の底



15



16



13-表



13-裏



17-表



17-裏



18



19－表

19－裏



20



21



23



25



22



24



26



27



29



30



31



28



32



33

報告書抄録

ふりがな	なかみちいせき
書名	中道遺跡Ⅱ
副書名	
巻次	
シリーズ名	二丈町文化財調査報告書
シリーズ番号	第40集
編著者名	古川秀幸
編集機関	二丈町教育委員会
所在地	福岡県糸島郡二丈町大字深江1360
発行年月日	2008年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
中道遺跡Ⅱ	福岡県 糸島郡 二丈町 大字深江	46		33° 30′ 36″	130° 08′ 56″	010921) 011001	110m ²	個人専用 住宅
	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
	集落	弥生時代 近世紀		柱穴状ピット 旧河川 取水施設		弥生土器 須恵器 近世陶器		

中道遺跡Ⅱ

二丈町文化財調査報告書
第40集

平成20年3月31日発行

発行 二丈町教育委員会
福岡県糸島郡二丈町大字深江1360

印刷 株式会社 西日本新聞印刷

